

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590100329		
法人名	社会福祉法人 明照福祉会		
事業所名	グループホーム明照		
所在地	宮崎市佐土原町下田島4575-1		
自己評価作成日	平成29年9月4日	評価結果市町村受理日	平成29年10月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php?action=kouhyou_detail_2016_022_kihon=true&ligvosyoCd=4590100329-00&PrefCd=45&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階
訪問調査日	平成29年9月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

歴史溢れる町の中にあり、のどかな畑にも囲まれ自然に大変恵まれている環境です。施設からは尾鈴山を優雅に見る事が隣接している保育園児の送迎風景など開放的に生活を楽しむ事が出来ます。また、外出の機会を多く持っています。散歩やドライブなど気候が良い日は外出気分転換、そして楽しみを持ち続ける生活を送っています。その中で、同法人内の施設(保育園・デイサービス・障害施設など)や外出先の方々など限られた空間、人との交流で完結しないよう開放的な生活が送れます。家族との関係性も大切に月1回以上は合同行事として一緒に過ごす時間を持ち続け企画や年2回以上は懇親会を行い、その中で生活への不安など解消し家族と一緒に安心して生活が送れるように努めています。利用者様の力(強み・楽しみ)に特化した支援も個別や小グループで行い出来る事の喜びを感じながら生活を楽しんでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成21年1月に社会福祉法人が開設したグループホームである。同敷地内に通所介護施設や保育園があり、日常の散歩や園児との交流など環境を最大限に活用したホームでの生活が営まれている。災害対策では「防災対策委員会」を設立し、いろいろな災害を想定した避難訓練計画や避難マニュアルを作成している。運営推進会議の中で避難訓練を視察してもらい、意見交換や助言を基にマニュアルの見直し等につなげている。ホームでは、各分野の研修を計画的に実施し、職員のレベルアップを図り、利用者や家族に安心感を与え、穏やかな生活ができるように支援している。外出支援にも積極的に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員会議内で研修テーマとして認知症ケアの理念の構築について実施する事で更に施設理念の重要性を職員内で理解を深め、共有する事が出来ている。また、会議内では必ず理念について唱和し共通認識や意識の統一を図っている。	「基本理念」、「介護理念」がある。全職員は理念の重要性について理解し、共有して日常のケアに努めている。基本理念の一つである「地域との関わりを深める」ため、ホームから地域に積極的に働きかけて交流を深めるなど実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のボランティア団体や社会福祉協議会の紹介、協力を得ながら積極的に交流が図れている。また、以前と比較すると交流会に限らず地域の催し物に足を運ぶようにアウトリーチ視点も重要視している。	自治会には加入していないが、地域のサロンに参加している。歴史のある夏祭りに出かけたり、ボランティアとの交流等、ホームとして積極的に取り組んでいる。同敷地内の保育園児とのふれあいを大切にしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通じ施設から認知症の情報の発信を出来る様にテーマを選定している。また毎月1回地域の認知症カフェに参加し認知症高齢者・その家族との交流を通じて認知症の理解を図っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年間行事を立案して必ず2ヶ月に1回開催を行っている。委員は積極的に参加され、客観的な意見を施設運営や支援の充実に取り入れている。また、その取り入れている内容については、委員が確認(見える化)出来る様にしている。※災害マニュアルの変更やリスクマネジメントについて行う。	会議では避難訓練を視察し、意見交換及び助言を行い、マニュアルの変更や充実につなげている。外出支援(動物園)に参加し、利用者の表情や行動を視察することで、意見等をサービス向上に役立てている。ヒヤリハットについて報告し、意見を参考にして再発防止に努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	宮崎市が主催している研修会(宮崎北地区施設ケアマネ研修会)や地域包括支援センターが主催している佐土原町他職種連絡協議会に参加し、情報の理解及び情報交換を行っている。しかし、連携をとっている職員は一部であり、内容について職員全員が情報を把握する事は実現できていない。	市が主催する研修会に参加し、情報の把握に努めている。市担当者とは、新規の事業運営に関する指導を受けるなど連携している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員会議内の内部研修を通じて「意思決定支援」「虐待・拘束の具体的な防止策」をテーマに職員内の適切な理解を図っている。また、具体的な取り組みとして玄関の施錠やサイドレールによる拘束は行っていない。今後も定期的に研修を行い身体拘束防止を図っていく。	全職員が研修を通じ、身体拘束をしないケアについて理解し、実践に取り組んでいる。玄関の施錠はなく、サイドレールは使用せず、自由な生活を支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設理念の実現に向けて入居者に尊厳と敬意を持った丁寧なケアに努めている。研修等の成果から以前と比較するとスピーチロックも減少している。職員全員が虐待防止について理解を深めていき、実現する事が最重要だと考えている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前は入居者に身元引受人がある事で問題はないと考えていたが、認知症介護の専門性を高めるためにも理解しておく必要があると考え、平成29年度から研修テーマとして権利擁護・成年後見人制度について研修を予定している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約を交わす時は、必ず時間をかけてご本人及びご家族に分かり易いように契約書や重要事項説明書に基づいて説明を行っている。また、制度上の変更点については変更に関する書類を作成し、その都度、確認と同意を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に3回家族会を開催し、家族や職員との意見交換を行い、意見や要望を聴取し施設運営やサービスの向上に反映させている。また、外部の客観的な意見をもらえる様に運営推進会議委員に家族会長(家族から選任)の出席の協力を頂いている。	家族会を開催し、意見や要望を運営に反映させている。職員と家族との交流を大切にし懇親会や家族合同バーベキュー大会を開催するなど、いろいろな場面で意見を聞く機会を設けて。「ホーム便り」を発行し、情報発信している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人内の定例会での報告事項や運営状況について定期的に全職員が確認できるシステムを整備している。また、職員内の意見・提案が運営に反映出来る様に事業計画の反省や評価を全職員で実施している。	年に1回、理事長、施設長との面接、月に1回、管理者が出席する定例会、月に2回職員会があり、それぞれ職員の意見や提案を聞く機会を設けており、ホームの運営に反映させている。法人全体でシステムを整え、全職員が活用している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長・管理者は各職員の勤務状況や個々の能力や成長段階に応じて計画的に指導を行っている。また、就業時間内に仕事が終えられるように効率化やルーティン業務の整備を行っている。また、年に1回法人事業者とのヒヤリングを実施し職員の意向調査を実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設長・管理者は個々の能力やキャリアパスを把握し外部研修を計画している。特に当施設では積極的に認知症実践者研修・認知症リーダー研修の参加を推進している。 ※毎年1名～2名研修に参加実績あり。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	佐土原町他職種連絡協議会・宮崎北地区施設ケアマネ研修会に積極的に参加し同業者との情報交換を行っている。今後の課題としてその研修内容が参加されていない職員に対して周知できるような取り組みも重要だと考える。※研修報告会など		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に十分に本人、家族と相談を行いながらニーズや要望を明確にしサービスの提供に努めている。しかし実際に入居され環境が変わることで本人のニーズも変わることもあるので、入居当初はセンター方式(24時間シート)を活用し心身状況やの情報収集を行い、情報を共有化しその情報に基づいたケアに繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人、家族のニーズを基にグループホームとしての機能を照らし合わせ、その人らしさに着目したサービスの提供を行っている。しかし、そのサービスが本人にとって本当に必要としていることなのか更に検証していく必要がある。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	利用者一人ひとりの楽しみや関心が持てる支援を常に考え提供を行っている。また、職員は一緒に楽しむ事・一緒にやりがいを見つucker事を念頭に取り組んでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者の個性や楽しみや関心が持てる生活に視点を置き、サービスの提供を行っている。また、生活の中で役割の拡大や出来る喜び、自信を職員と一緒に感じて頂ける支援内容を提供している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と本人が楽しめる行事を月1回家族合同行事として企画している。今年度は家族合同行事の参加が積極的にある。家族も非常に楽しんでいる様子。課題としては参加される家族はいつも同様の家族に限られてしまうので、普段参加が行えない家族に対して参加を図る取り組みも今後重要だと考える。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	隣接するデイサービスへ訪問し馴染みのある方との交流を図っている。また、ボランティアで昔、馴染みのある方の存在もあるので定期的にボランティアの参加も図っている。また、地域の歴史にも触れて頂ける様に伝統の行事の参加や地域ボランティア交流を積極的に図っている事に加え、新たな出会いとして新規のボランティアなども募集している。縁が途切れないように定期的に交流を継続していくことが今後重要。	隣接する通所介護施設での交流、ボランティアとの交流の中で、なじみの人との関係継続を支援している。伝統の夏祭り、利用者の思い出のある海や温泉など、なじみの場に出かけていく機会を設け支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	日常生活から利用者同士の関わりを深める ために、会話や行事に職員が介入し関係構 築に努めている。また、普段の配席からも関 係性を重視した環境整備を心掛けている。 また、トラブルにならない様に常時、利用者 が集うフロアでは観察(表情・言葉)に努 め早期に対応している。※楽しく挨拶や会話 が出来る様に職員が代弁する事もある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族 の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時は、出来る限り面会を行い、職員内 で作成した色紙をプレゼントし関係性が途 絶えないようにしている。また、契約が終了 したご家族に対して家族会の参加や行事の 参加を呼び掛けている。楽しく参加して頂い ている。家族の負担にならない様に無理なく 気軽に参加出来るように努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	利用者の可能性に視点を置いて職員はモニ タリングを行っている。また、絶えずニーズ は変化する事があるが、状況に応じて柔軟 に対応が行えている。職員がニーズ・状態 の変化に早期に気づく事やそのニーズの重 要性に気づく事が今後の課題だと考える。	センター方式(認知症の人のためのケアマネ ジメント方式)の一部を活用し、利用者の思 いや意向の把握に努めている。家族から生 活歴等の情報を得て参考にしている。食べ物 や飲み物の嗜好は、食事の時に表情を観察 することで把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に 努めている	これまで本人が培ってきた生活歴や生活環 境を大切にしている。また、家族からの情報 なども収集し、環境や支援に活かしている。 しかし、入居開始前から情報収集は行っ ているが、新たな情報なども存在する。その情 報を支援や形に変えていく事に努めてい る。※故郷や思い出の地を実際に訪れてみ るなど…また、日課にされている事を入所し ても継続できるような支援。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎月1回行っているモニタリングを通じて本人らしい生活や心身状況の変化について分析を行い、職員会議内で報告及び検証している。また、利用者一人ひとり生活のスタイルは異なっているので、その生活スタイルを尊重した提供に努めている。また、その事を職員全員で協議する場としてカンファレンスを有効的に活用している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画担当者のみならず、各職員が本人の介護計画に基づいた評価モニタリングを行い、職員会議で報告を行い、全職員で協議を行った上で現状及び今後に向けた介護計画を立案している。また、職員全員がケアマネジメントの基礎となるPDCAサイクルを理解している。			
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	その人に応じたケアを記載できるように、必要に応じて書式を変更している。また、支援経過記録にケアを行った職員はケアを行った事実以外にも感じた事・考えた事を記載できる欄を整備し、更にケアのヒントとしてモニタリングに記載するように努めている。※事実と考察は異なるので記載するには職員の能力にも左右される事がある。記録の記載方法			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	地域密着型サービスとして運営推進会議での意見をケアや防災について反映させている。また、看取りケアを開始するに当たり、医療ニーズが高くなった状態では地域の訪問看護ステーションと連携をとり訪問看護サービスを受ける事が出来る様に柔軟に対応が行えた。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターに運営推進委員として参加して頂き、地域資源の発掘について協議を行った。様々な提案があったものの取り組んでいるのは一部なので実現に向けて更に具体的な取り組みが必要。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望する医療機関での受診を行っている。基本的に日常の状態を把握している施設側での対応が多いが、家族の協力要請が得られる時には家族での受診も行っている。その際は必ず日常の状態を詳細に報告するように努めている。受診後の報告も確実にやっている。	利用者がかかりつけ医に継続して受診できるように支援している。受診は日常の状態を把握している職員が同行し、結果を家族に報告している。家族が同行する場合は、ホームでの状態を説明し、受診後の報告を受けている。往診や訪問看護を受けられるように支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が常勤として勤務されているので利用者の健康状態について助言や指示を仰ぐように努めている。また、医療知識を学ぶ研修(感染症・看取りケア)としては講師を引き受けてもらい医療知識を深めている。※近日では知識もだが実践による研修も開催している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院を行う際は詳細に情報提供を行っている。また、入院時は短期間でも定期的に面会を行い、状態の把握に努めている。退院時は退院前の準備として必ず状態の変化に応じてプランの見直し及び変更を行い、それをケアカンファレンス会議を開催しケアの統一を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り推進委員会を看護師を含めて設立し看取りに必要な知識や技術を習得できる研修を行っている。看取りの意向についても定期的に看取りの意向を確認している。また、看取り期に入っても揺れ動く本人・家族の想いに心を傾け傾聴する姿勢に努めながら本人・家族の意向に沿った看取りケアを目指している。そして、地域の訪問看護ステーションや主治医との連携も図っている。	看取り推進委員会を設立し、毎月決められたテーマについて研修を実施している。「重度化した場合における(看取り)指針」を作成し、主治医や訪問看護ステーションと連携し、終末期における支援体制を構築している。家族会でも説明し、方針を確認している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に急変時の応急処置の研修を受講している。参加する職員も多数いて意識が高いように感じる。今後はその研修で学んだことが実践でできるかが課題になってくる。※出来ない時には繰り返し自身で練習する姿勢も大切。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災対策委員会を設立している。委員会を中心に様々な月1回災害(火事・地震・津波・停電)を想定した避難訓練計画及び避難マニュアルの整備を行っている。また、マニュアルは随時見直し検証を繰り返している。また、専門的で客観的な指導を受ける為に専門業者・消防署との避難訓練も実施している。左記に記載しているマンパワー不足については応援要請のあり方だけでなく応援が求められない時にグループホーム単体の避難方法も考えて行かなくてはならない。	防災対策委員会を設立し、避難訓練計画や避難マニュアルを整備している。運営推進会議の中で夜間想定避難訓練を実施し、委員が訓練状況を視察して助言し、マニュアル等の変更改善につなげている。いろいろな災害を想定し、応援者を決め、災害対策に積極的に取り組んでいる。災害に備えた飲料水や食糧、トイレ等の物品が十分に確保されていない。	災害時に、ホームに必要な量の飲料水や非常用食糧、その他物品の備蓄、また、避難先での備蓄についても確認が望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人及び家族に対して尊厳や敬意を持った言葉遣いや態度に心がけている。研修内容においても接遇といった部分で学ぶ機会を設けている。また、基本的に必ず本人の同意、了解の下に介助を行いプライバシーの確保を図っている。	職員は日常会話の中で、利用者に対して丁寧な言葉かけを行い、「ありがとうございます」と感謝の言葉をかけながら対応している。トイレ介助に関しては一人ひとりの人格を尊重した、さりげないケアに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人自身が自ら選択できるような説明や対応を行い、自己決定に基づいたケアを行っている。また、どうしても自身で自己決定が困難なケースでは家族に連絡を取り、家族の意向を尊重できるように対応を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の生活スタイルはそれぞれあるので、本人の過ごし方過ごしたい環境に出来るだけ対応している。自身で主張が難しい時には家族から意向などを聴取しケアに反映するように努めている。また、実現が困難なケースだとしても「本人らしさ」と職員は捉えて実現を目指すように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服や髪形などについても本人の意向を尊重している。また、本人自身で好きな衣服を購入できるように、地域の衣料品店に外出し買い物を支援している。(春・秋)しかし、整容といった部分で職員の配慮が不足している事もある。(季節感のない衣服、髭剃り、爪切り)		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	グループホームの機能を活かし台所での家事(皿洗い・食事の盛り付け・味見)を職員と一緒に取り組みながら出来る喜びや達成感を共感している。また、グループホーム畑で獲れた季節の野菜を調理して、食べる楽しみや喜びを一緒に感じて頂いている。	朝食はホームで作り、昼食と夕食は隣接した通所介護施設で一括調理をしている。利用者は職員と一緒に盛り付けなど食事の準備をしており、役割の拡大について工夫している。テーブルの上でホットプレートを使い、利用者の希望のメニューと一緒に作るなど食事を楽しむ支援をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	支援経過記録に食事摂取量や水分摂取量の記載を行い摂取量の把握を徹底している。特に水分に対しては脱水のリスクも高い為に、摂取量が少ない時には工夫(好きな飲み物の提供・時間帯を変更)を行いながら安定的に水分摂取を図っている。また、屋外での活動や活動量が多い活動後にも必ず水分のアプローチを行っている。また、状態・必要に応じて摂取量と排泄量を毎日細かに観察し、状態の把握や必要なケアを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持や誤嚥性肺炎予防の為に、毎食後必ず口腔ケアを行っている。また、使用した歯ブラシ・コップは毎回洗浄と乾燥を行い衛生面に配慮している。義歯を使用されている方についても、必ず就寝前には義歯を預かり洗浄を行っている。そして、今年度は外部・内部における口腔ケアの研修に参加し口腔ケアの重要性を周知している。また、食後に必ず口腔ケアを行った事を確認出来るチェックシートを整備し確実な実施に取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	支援経過記録に排泄状況を記載できるように整備し排泄の管理に努めている。また、排泄パターンを把握し、適切な時間にトイレに誘導を行う事で失禁予防を図っている。排便管理についても確実に把握が出来ており、必要に応じて座薬・緩下剤を使用して排便管理に努めている。	排せつパターンを把握し、トイレで排せつできるように誘導している。排せつ状況を記録し、活用している。退院後はリハビリパンツから布パンツになったケースもあり、排せつの自立支援に取り組んでいる。職員は誇りやプライバシーを損ねない排せつ支援の方法について理解している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	積極的に水分摂取を図り水分摂取量の管理を行っている。また、腸の活性化を図るためにおやつ時には乳製品(ヨーグルト・牛乳など乳酸飲料)の提供を行っている。また、運動においては腹部の筋力向上の為の訓練も行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	出来る範囲で本人の意向や希望に沿った入浴を心がけている。特に時間帯(午前・午後)において本人の気分で入浴を楽しむ事が出来ている。また、健康面から入浴前には必ずバイタルチェックを行い安全・安心な入浴に配慮している。	利用者の希望に合わせて入浴支援をしている。入浴を拒むケースでは、対応する職員を変更する、時間帯を変更する、気分転換の後に誘導するなど工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	必ず本人に確認を行い一日の中で休養を設けることで活動意欲の向上や心身状態の安定を図る事が出来ている。また、眠剤は出来るだけ使用しないように職員内で共通認識を持ち、主治医と相談したうえで使用を行っている。 休養については、これまでは居室のみで行っていたが、本人の落ち着ける環境が必ずしも居室とは限らず、みんなが居る所の方が落ち着かれる方の存在もあるので、その方の希望に応じて和室や簡易ベッドを活用した休養方法も取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護師を中心に服薬管理を行っている。また、全職員に薬剤の変更や注意点を周知するために、病院受診報告書に服薬の情報を記載するように努めている。また、点眼や軟膏については毎日確実にを行うために、独自でチェック表を整備している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各利用者のこれまでの生活歴や趣味を活かし個別支援として提供を行っている。また、共存、役割として職員と一緒に出来て楽しみが持てる視点を大事にしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設周辺がのどかで自然(田・畑)に触れることが出来るため、気候の影響が少ない時には散歩の機会を積極的に図っている。また隣接している保育園やデイサービスにも気軽にいく事が出来て、園児や友人との交流を楽しむ事が出来る。そして、以前より畑の環境を整備する事が出来ていてその畑から育つ野菜や花々の成長を利用者と一緒楽しむことが出来る。今後も継続していきたい。	日常的に近隣への散歩や隣接の保育園や通所介護施設に出掛けるなど、戸外で過ごす時間を大切にしている。動物園への外出支援、商業施設に出かけての買い物支援等を実践している。職員は外出支援の意義と重要性を理解し、積極的に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の管理は紛失のリスクがあるために、一定額を預かり金として施設側が管理している。買い物へ出かけた際に個人の物品の購入時は可能な限りレジで金銭の支払いを行うように対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状や暑中見舞いを利用者に書いて送付していただいている。(書くことが出来ない方は職員が代筆を行っている)また、施設側に送られてきた手紙や年賀状も必ず本人に渡すようにしている。電話についても本人の希望があれば、電話の支援を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関やフロア廊下の壁に四季を感じて頂ける壁画やオブジェを置き、落ち着くことが出来る環境を整備している。また、好まれている歌や懐かしい映画や映像を楽しむ事が出来る。消臭や清潔の為にフロアに2台空気清浄器を設置している。	温度計、湿度計を参考にしながら快適な環境づくりに努めている。特に冬季にはインフルエンザ予防のため湿度に留意している。見やすい位置に時計を2か所に架けたり、音楽や映像を楽しむコーナーを設けるなど利用者のために配慮した空間づくりをしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアでは洋室、和室を希望や状態に応じて活用できている。また、テーブル2台を多目的に活用することで集団・ユニットの活動を実現している。また、椅子だけでなくソファも整備しているので、対面だけでなく隣接したコミュニケーションも図る事が出来ている。 そして和室にTVやソファを整備してゆっくり落ち着ける雰囲気作りをこころがけている。また、近日は簡易ベッドを整備する事で休養も行う事が出来ている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が心地よく居心地の良い環境で過ごせるように馴染みのある物や写真などを家族と相談して整備している。画一的ではなく各居室に本人の個性や本人らしさを出すことが出来ている。	入居時に本人や家族と話し合い、テレビやたんす等を配置している。枕や毛布は使い慣れたものを持ち込んでもらい落ち着いて生活できるように支援している。置の生活を希望される場合には対応できるように準備しており、居心地の良い居室になるように配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内の標示や設備も状況に応じて変更している。安全で自立した環境整備に努めている。危険な環境があるときにはヒヤリハットを活用し直ぐに安全な環境整備を行っている。また、基本的に利用者の動線に物などを置かない配慮も行っている。		